

# トフタムイシ汗とキプチャク汗国の解体

——汗国史へのエチュード (4)——

加藤 一郎

## Тотамыш и Распад Золотой Орды

——попытка изложения истории Золотой Орды (4)——

Ичи́ро Като

### はじめに

筆者が今日までに、キプチャク汗国の通史を記述するための基礎的な作業として発表してきた小論の内容は以下のとおりである（全体の構成を明らかにするために、各小論にはつけられていない通し番号を付けてある）。

- (1) はじめに——（モンゴルのロシア支配の意義に関する諸説）
- (2) キプチャク汗国の成立
- (3) 汗国の統治様式
- (4) 汗国とルーシ諸公
- (5) おわりに——（今後の課題）

——以上、「モンゴル人によるルーシ支配の開始」『史潮』新10号（歴史学会，1981）

- (6) バトウ汗からベルケ汗へ
- (7) 汗国へのイスラム教の浸透
- (8) モンゴル帝国の内紛とキプチャク汗国の自立
- (9) イル汗国の抗争とマムルーク汗との同盟
- (10) ベルケ治世下のロシア
- (11) メング・チムール汗と汗国のロシア教会政策
- (12) メング・チムールの対外政策
- (13) ノガイの台頭
- (14) トフタ汗とノガイの対立
- (15) 汗国の二重権力時代のロシア
- (16) トフタ汗によるロシア支配の再建

——以上、「13世紀後半のキプチャク汗国とロシア」『文教大学教育学部紀要』第19号，1985年

- (17) ウズベク汗の即位
- (18) ウズベク汗の治世

- (19) ウズベク汗治世下のロシア ①モスクワとヴェーリ
- (20) ウズベク汗治世下のロシア ②イヴァーン・カリターの登場
- (21) ウズベク汗死後の後継者争いとジャニベク汗の即位
- (22) アゼルバイジャン侵攻
- (23) 汗国の地位の低下

—以上、「14世紀前半のキプチャク汗国とロシア」文教大学言語文化研究所紀要『言語と文化』第1号、1988年

- (24) ジャニベク汗の殺害と汗国の混乱時代
- (25) 諸公国の分立
- (26) 混乱時代とルーシ
- (27) クリコーヴォの戦い

—以上、「14世紀後半のキプチャク汗国とロシア」文教大学言語文化研究所紀要『言語と文化』第2号、1989年

- (28) トフタムイシ汗の登場
- (29) トフタムイシによる汗国の再統一
- (30) ルーシ支配の再建
- (31) トフタムイシとチムールの衝突
- (32) トフタムイシの再興
- (33) チムールの汗国およびルーシ侵攻
- (34) キプチャク汗国の解体

—以上本号

またモンゴルのロシア支配のロシア史上での意義に関して、専門外の読者向けに解説した小論として「タタールの軛」(『ロシア帝国の興亡』、「歴史読本ワールド」1991年11月号)がある。

### トフタムイシ汗の登場

1359年のベルジベク汗の死後、約20年間続いた汗国の混乱時代は、汗国最後の英主トフタムイシ汗の再統一によって終了する。この過程ならびに汗国の再度の分解に強い影響を与えたのが、オルダのウルス＝青帳汗国の貴族層とチャガタイ汗国の後継者としてイラン地方に大帝国をうちたてたチムールであった。

汗国の混乱時代には、いずれも短期間であったが、ヒジル汗(1360春—1361年)、チムール・ホジャ汗(1361年)、オールド・メリク汗(1361年)、ミュリト汗(1361—63年)といったパトゥの兄弟オルダ・イチェンの系統の汗がはじめてキプチャク汗に即位していた。彼らを汗位につけたのは強力な中央集権国家を望み、汗国の再統一を志向した青帳汗国の貴族層であった。中央アジアの繁栄した商業都市を基盤としたこうした貴族層は、汗国の経済的統一性(具体的には幣制の全国的な統一)を維持するために、最初はウルス汗、ついでチムールと同盟したトフタムイシ汗を強力に支援するようになったのである<sup>(1)</sup>。

1370年にマウランナウル地方を統一しサマルカンドを都としたチムールは、この地方を本拠地として大帝国の建設に着手し、1371年には、二度にわたるモグリスタン遠征を企て、中央アジアの平定に成功していた。しかし、1372年に開始されたホレズム遠征は、キプチャク汗国から独立

して当地を支配していたスーフィ朝がチムールへの服従を拒否し、さらに汗国のウルス汗もホレズム地方への支配権を主張していたために、失敗に終わった。とくに、ウルス汗はチムールへの服従を拒否するエミールや領主（モグリスタンのカマル・アディン、ホレズムのアディン・シャー、サリ・ブガ）を保護し、チムールへの抵抗を強化していたために、チムールはホレズム地方の軍事的征服という計画を一時放棄し、まず汗国内部の権力争いに介入してウルス汗を失脚させようと考えた<sup>(2)</sup>。

ここで登場してくるのがトフタムイシである。トフタムイシの出自については異説があるが、チンギス汗の長子ジュチの第13子トゥカ・チムールの子孫であると推定されている<sup>(3)</sup>。彼の父トゥイ・ホジャはウルス汗と対立し、その命令に従わなかったとの理由で処刑され、このためにまだ幼年のトフタムイシはウルス汗のもとを離れ、1376年にチムールのもとにやってきた<sup>(4)</sup>。もともとチンギス一族の血筋を持つものには敬意を支払い、さらに政治的にはウルス汗を失脚させるための道具を手に入れたチムールはこのトフタムイシを大いに歓迎したという。チムール帝国の歴史を記した15世紀の史書によると、「陛下（チムール…引用者）は彼（トフタムイシ…引用者）の到着を高く評価され、チンギス汗家の高貴な家柄を持つ人物の（出現にあたって）、細心の注意を支払って彼を迎え、敬意を表された。酒宴を開くという慣行を実施されたさいにも、陛下は彼と彼の従者にたいそうな富を分け与えられた。……それは筆舌に尽くしがたいほど豪華なものであった。陛下は御自分の限りない敬意と好意のしるしとして、彼を息子と呼ばれた。」（シェレフ・アディン・イェジ）<sup>(5)</sup>さらに、チムールはトフタムイシに領地としてサウラン（オトラル）地方とシグナタ地方を与えた。

これに対して、ウルス汗は息子クトルク・ブガの軍勢をトフタムイシに対して派遣した。サウラン周辺での両軍の戦闘では、クトルク・ブガが戦死したにもかかわらず、トフタムイシが敗れ、チムールのもとに逃亡した。チムールは再度彼を鄭重にむかひいれ、援軍をあたえてサウラン地方に戻らせた。これをみたウルス汗は自分の長男トフタキヤ、その他の王子、アリ・ベクなどのエミールの軍勢をトフタムイシに差し向け、これを打ち破り、トフタムイシはまたもチムールのもとに逃亡した<sup>(6)</sup>。勝ち誇ったウルス汗はトフタムイシの保護者であるチムールに、「トフタムイシは予の息子を殺した。彼があなたの所領に去ったことは判っている。予の敵を引き渡していただきたい。もしそうでなければ、戦場を指定していただければ、すぐさま参上する」との不遜な最後通牒を送った。もちろん、チムールは「彼（トフタムイシ）は予のもとに保護を求めてきた。彼を引き渡すことはできない」<sup>(7)</sup>と拒絶したので、ウルス汗とチムールとの衝突は決定的となった。

1377年冬に始まるウルス汗とチムール軍との衝突は、降雪と寒冷のために決定的な戦闘がなかなか起こらなかったが、結局チムール軍が勝利を取め、ウルス汗は戦死した。だが、トフタムイシの権威がこれですぐさま確立したわけではなかった。ウルス汗の死後、彼の息子トフタキヤが、ついで2ヶ月後にはやはり彼の息子のチムール・メレクが実権を掌握し、トフタムイシはチムール・メレクに敗れて三度目の逃亡をしなくてはならなかった。

しかし、トフタムイシに勝利を取めたこのチムール・メレクは国事を省みず、人望を失っていったという。史書には「夜毎日毎チムール・メレクは飲酒、気晴らし、娯楽にふけており、正午まで眠っていた。数千の重要な事態が持ち上がったときでさえも、誰もあえて彼の目を覚ませようとする勇氣を持っていなかった。このために、人々は彼に失望し、すべての国々と地域がトフタムイシの登場を要求していた」（ニザム・アディン・シャミ）とある<sup>(8)</sup>。すでにウルス

汗の時代に、青帳汗国の最有力のエミールであるエディゲイがウルス汗のもとを去っていたが、チムール・メレクの治世になると青帳汗国の多くの貴族が彼のもとを離れようとしていた（実は、チムール・メレクの様子をチムールに伝えたのも、青帳汗国からチムールのもとにやってきたウルク・チムールであった）。青帳汗国の不統一という好機をとらえて、チムールはトフタムイシ支援の大軍をチムール・メレクに差し向けた。多数の援軍を手に入れたトフタムイシ軍は、カラバク河畔の戦いでチムール・メレクを打ち破り、彼を捕えて処刑した。このころすでに、カザン・バハドゥル、アルベクなど青帳汗国の有力なエミールはトフタムイシのもとに参じていた。

### トフタムイシによる汗国の再統一

こうして青帳汗国を平定したトフタムイシは、ジュチ・ウルスの右翼すなわちバトゥのウルス（狭義のキプチャク汗国）の平定に着手した。かれは1380年春、サライ地方、ママーイの支配地域、アーストラハン地方（ハジ・チェルケスの独立公国があった）の征服に向かった。この経過をイブン・ハルドゥンはこう記している。「スルタン・チムールは自分の軍勢とともにトフタムイシに協力し、彼を助けて、自分の領土の境界まで進出し、それから帰国した。一方、トフタムイシはさらに前進し、ホレズム山脈のウルス汗の分封地を領有した後にサライに向かった。ここにはウルス汗の代官がいたが、トフタムイシはサライをこの代官から取り上げた。（こうして）トフタムイシはママーイが彼から取り上げた（この一節は、事実関係からは不正確である…引用者）領地を回復した。彼はアーストラハンのハジ・チェルケスの分封地をも征服し、篡奪者の手中にあったすべてを奪った。そして、篡奪者の痕跡をぬぐいさり、ママーイを追ってクリミアに入った。ママーイは彼から逃亡した。」<sup>(9)</sup>

モスクワ大公ドミートリイとのクリコーヴォの戦いに敗れたママーイは、再度のドミートリイとの戦いに備えて兵を集めていたが、トフタムイシの進撃を知ると、この軍勢をトフタムイシに差し向けた。両軍は1381年にコルマク河畔（カルカ河畔という説もある<sup>(10)</sup>）で衝突し、ママーイは敗れてクリミアに逃亡したが、カフファ市のジェノヴァ人との間に紛争をおこし、彼らに殺されてしまった。1361年以来キプチャク汗国の版図の内でヴォルガ以西の地域を支配し、そのことによってキプチャク汗国を二分してきたママーイ政権は、ここに消滅した。

この結果、トフタムイシは青帳汗国に加えてバトゥのウルスも自分の支配下に置くことになり、広義のキプチャク汗国の再統一に成功したことになる。トフタムイシは「勇敢で、……立派な君主であった。彼の公正さとその善良な性格は広く知れわたっていた」<sup>(11)</sup>（アノニム・イスカンデラ）と記されているように、人望があり、また精力的で野心的な人物であったようである。だが、彼がウルス汗とその息子達に勝ち、さらにママーイを打ち倒してキプチャク汗国の再統一に成功した第一の要因は、チムールの業績を記した『勝利の書』が「彼（トフタムイシ…引用者）の権威と威勢は高まり始めた、そしてチムールの幸いな好意のおかげで、すべてのジュチ家のウルスはトフタムイシの権力と国家のもとに入った」<sup>(12)</sup>と記しているように、チムールの軍事的・政治的支援の存在であった。青帳汗国のエミールやママーイ政権のエミールがトフタムイシのもとに参じてきたのも、彼の背後に強大なチムール帝国の存在を見ていたからこそであった。換言すれば、チムールとの同盟（より正確にはチムールによる庇護）こそが、トフタムイシの権力と汗国の統一を支えていたのである。

## ルーシ支配の再建

汗国の統一に成功したトフタムイシは当然のことながら今度はルーシ支配の再建に着手した。彼は、クリコーヴォの戦いでママーイに勝利を収めていたモスクワを屈伏させるにあたって、仇敵ママーイの対モスクワ政策を踏襲し、リトアニア大公ヤガイラと結んだ<sup>(13)</sup>。彼は、モスクワ大公ドミートリイを筆頭とするルーシ諸公に使者を發して、ママーイに対する勝利と自分の即位を伝えた。以前ならば、ドミートリイ自身がトフタムイシのもとに参じて、恭順の意を表さなくてはならないところであったが、クリコーヴォでの戦勝に意気上がるドミートリイは、贈りものをもたせた特使を派遣したにすぎなかった。トフタムイシはドミートリイを汗国に召喚するために、汗使アク・ホジャと700名の汗国軍をモスクワに派遣したが、この使節団はニジニ・ノーヴゴロトにまで行っただけで、モスクワには行くことが出来なかった。ここにいたってトフタムイシは軍事的にモスクワを屈伏させることを決心した。

トフタムイシ軍がモスクワに進撃するために、ヴォルガを渡河したとの知らせは、ルーシの諸公にとっては不意のことであった。このために、ニジニ・ノーヴゴロト公ドミートリイ・コンスタンチノヴィチは息子のヴァシーリイとセミョーンを急速トフタムイシのもとに送って、恭順の意を表さざるをえなかったし、リャザン公オレク・イヴァノヴィチもやはり汗国軍に協力して、モスクワに至るオカ川の浅瀬を教えている。

モスクワでも、トフタムイシ軍の進撃の知らせが届くと、多くの貴族達は抵抗不能なことを理由に、壊滅的な打撃を避けるために降伏することを提案した。一方、ドミートリイは抵抗を決意し、北部で軍を集めるためにモスクワを離れて、コストラマーに去った。モスクワ市はかつてリトアニア大公アルギルダスの襲撃を二度にわたって撃退した経験を持っており、モスクワ市の抵抗によって、自分が軍勢を集める時間が稼げると判断したためであろう。しかし、ドミートリイが去った後のモスクワでは、混乱が起こった。モスクワ市の富裕な層は市から脱出しようとしていたのに対し、下層市民は民会を開いて抵抗を決意していたからである。結局、抵抗派がモスクワ市の主導権を握り、市の防衛を強化すると同時に、市からの逃亡を禁止し、逃亡者の財産を没収する措置をとった<sup>(14)</sup>。この際、市の防衛司令官にはリトアニア出身の公オスチェイが任命されているが、リトアニア大公アルギルダスの孫とされるオスチェイが選出されたことは、モスクワ市民が地元の貴族層をいかに信用していなかったかを明らかにしている。

トフタムイシ軍はオカ川を渡り、コロームナを占領して、1382年8月23日モスクワに接近、これを包囲した。モスクワは3ヶ月間の包囲攻撃にもかかわらず陥落しなかったために、トフタムイシは策略を用いることとし、ニジニ・ノーヴゴロト公を伴った使者を送って、「汗は彼らを(モスクワ市民を…引用者) 目的にやって来たのではなく、ドミートリイを目的にやって来たこと、汗はオスチェイ公と市民が少しばかりの贈り物を持って自分に会いに出てきてくれることだけを望んでいるにすぎないこと、汗は町を視察することを望んでいるにすぎないこと、汗は市民に平和と愛を与えようとしていること」<sup>(15)</sup>を伝えさせた。モスクワ市民はこの提案を軽信して開門し、オスチェイ公と市民は聖職者を先頭にたててトフタムイシに会いに出かけた。ところが、トフタムイシはオスチェイ一行を殺し、軍勢は開かれた門から市内になだれこみ、約24000名を殺戮したという。

トフタムイシのモスクワ占領は、北東ルーシの盟主としての地位を固めつつあったドミートリイ・ドンスコイの立場を著しく弱めた。この機を利用して、モスクワ公のライバルであったト

ヴェーリ公ミハイールはトフタムイシにとりいり、かつてのようにウラヂーミル大公位を手に入れることはできなかったものの、汗国の従臣となることによって、モスクワへの政治的従属を定めた1375年のモスクワ・トヴェーリ条約を破棄することに成功した。ニジニ・ノーヴゴロト公国では、ドミートリイ・コンスタンチノヴィチの死後、ドミートリイ・ドンスコイに敵対していたボリス・コンスタンチノヴィチがトフタムイシの許可を得て、ニジニ・ノーヴゴロト公位を獲得した。トフタムイシは、1388年に故ドミートリイ・コンスタンチノヴィチの息子セミョーンとヴァシーリイがモスクワ勢の助けを借りて、ボリス・コンスタンチノヴィチの追放に成功したときにも、この事件に干渉して、ボリスを復権させている。また、かねてから汗国と良好な関係を保っていたリャザーン公オレク・イヴァノヴィチは、1385年春、モスクワ公国に帰属するコロムナを急襲し、当地のドミートリイ・ドンスコイの代官を含む多数の貴族と市民を捕らえた。ドミートリイ・ドンスコイはモスクワ軍をリャザーンに送ったが敗北してしまい、リャザーン公国と争う力を失って、オレクに和を請わなくてはならなかった。

このように、北東ルーシの盟主としてのドミートリイ・ドンスコイの地位は著しく低下し、北東ルーシの諸公の間には、旧ソ連史家の用語を使えば「分離主義的傾向」が再度はばをきかせるようになった。ドミートリイはウラヂーミル大公の地位は確保したものの、汗国に対して重い貢税を支払い、汗の使者（ポソール）の直接の監督を受けるという条件のもとにあった。ドミートリイは1384年に「各村について半ループリという重税を集めよ」との指令を発しており、同年、汗使アダシがウラヂーミルにやって来ている<sup>(16)</sup>。徴税とともに、汗国のルーシ支配のもう一つの柱である徴兵も実施されたと思われる。「トフタムイシは全ジュチ・ウルスから……大軍を集めた。ルーシ人、チェルケス人、ブルガール人、キプチャク人、アラン人、カフファとアザクからのクリミア（人）、バシキルト人……からなる並外れた大軍が集まった」と史書にあるように、1388年のトフタムイシの中央アジア遠征軍には、多数のルーシ人兵士が徴兵されたのである。こうして、北東ルーシは名実ともに再度キプチャク汗国の属邦となったわけである<sup>(17)</sup>。

### トフタムイシとチムールの衝突

トフタムイシはその成功の多くをチムールに負ってきたものの、キプチャク汗国の統一を達成すると、チムールとの対等ひいてはチンギス一族の血統を受け継ぐものとして、チムール以上の汗として行動するようになり、チムールとの亀裂を深めていった。この衝突の原因としては、心理的には野心的・精力的なトフタムイシがチムールの従臣という地位に満足できなかったことがあげられるが、政治・経済的にはアゼルバイジャン地方の領有をめぐるキプチャク汗国とチムール帝国との対立があげられる。チムールは数次にわたるイラン遠征によって、アゼルバイジャン地方を制圧しようとしており、これがキプチャク汗国のとくに商業的な利益を脅かしたからである。この地方は中近東方面へのキプチャク汗国の窓となる地域であり、かつてキプチャク汗国とイル汗国が争奪戦を繰り広げた地域であった。この地政学的な意味からも、キプチャク汗国とチムール帝国との紛争は「13世紀末と14世紀のキプチャク汗国とイル汗国との古い対立の再現であった。」<sup>(18)</sup>したがって、トフタムイシはチムールに対抗するにあたって、イル汗国と対立したウズベク汗などと同様に、エジプトのマムルーク朝と結ぼうとした。エジプト側の年代記には「786年（1384年2月24日—1385年2月11日）、ウズベクの地（キプチャク汗国…引用者）の君主トフタムイシ汗の使者がやって来た」<sup>(19)</sup>とだけの記録があり、使者の目的については記していな

いが、その後の3国の動きから判断する限り、目的は対チムール同盟の締結であったのであろう<sup>(20)</sup>。

1385年、トフタムイシはシルヴァン地方に大軍を派遣した。9—10万といわれる大軍は、デルバンドを越えてタブリーズ市を包囲した。タブリーズ市はこの大軍によく抵抗し、8ヶ日間の包囲の後に、250トゥマン（イランの金貨、1トゥマンは1万銀ディナール）を支払うことで講和した。だが、トフタムイシは翌年、この協定を破棄してタブリーズを襲撃し、これを徹底的に略奪した。「結局のところ、背信者の軍（トフタムイシの軍…引用者）は策略と悪だくみによって、権力と力によって勝利を収め、町を占領・略奪し、崩壊させた。彼らは——できることといえばそれだけだったのであるが——すべてを迫害・破壊し、イスラム教の寺院と学校を破壊し、老人・青年を逮捕・拘禁した。彼らは、長い年月をかけて町に集められた財産、財宝、珍品を10ヶ日であとかたもなく持ち去ってしまった。彼らは冬に、奴隷を集め、略奪品を集めたのち撤退していった」<sup>(21)</sup>というわけである。

ところが、チムールはこのようなトフタムイシの恩義を忘れた行動に対してすぐさま懲罰活動に移ろうとはしなかった。彼は、トフタムイシに対して、シェイフ・アリ・バハドゥル、イク・チムール、オスマン・イ・アッバスの軍を差し向けているが、その際、このエミール達に「我々とトフタムイシ汗の間には条約と協定があり、我々はこの条約を守る。だから、彼の軍を発見した場合には、戦闘を差し控えて戻ってくるように」<sup>(22)</sup>と指示している。さらに、自分が派遣したミルランシャフの軍がトフタムイシの軍と遭遇して、多数の捕虜を捕まえたときにも、チムールは捕虜を鄭重に扱ってこう語っている。「我々の間には父と息子の法がある。数名の愚か者のためにどれほどの人々が滅びることであろう。我々は今後、条件と条約を守り、すでに静まった紛争を引き起こさないようにしなくてはならない。そしてもし誰かがこれと反対のことをしたり、我々の頭の中にこれと反対のことを吹きこもうとするならば、我々は双方の側から、そのほかの者にとってのみせしめとなるように、この者をこらしめ、処罰・処刑しなくてはならない。」<sup>(23)</sup> こうしたチムールの寛容な姿勢は、軍事的反攻の準備時間をかせぐためであったのか、それともチングス一族の血統に敬意を支払って、トフタムイシに弓を引くことをためらっていたためであったのか判然としていない。いずれにせよ、トフタムイシはチムールの寛容な姿勢につけこんで、攻勢を強めていった。

1387年、トフタムイシはベク・ヤルイク・オグラ、イリグムイシ・オグラ、イサベク、サクティン・バハトール揮下の大軍をサウランに、また別働隊をブハラに派遣した。マウランナウル地方の守備隊が敗れたために、当時シーラズにいたチムールはオスマン・イ・アッバスの指揮する3000の騎兵を支援に送り、自分自身もサマルカンドに陣を進めた。トフタムイシ軍はチムール自身の出馬を知って動揺し、ホレズム地方、キプチャク大草原方面に逃亡した。<sup>(24)</sup>

この1387年のトフタムイシ軍の後退は、軍事的な大敗北というものではなかったけれども、トフタムイシ陣営の中に動揺を引き起こした。トフタムイシ政権を支えていた青帳汗国の貴族層の中には、もともとチムールに共感を寄せていた分子がいたが、彼らがトフタムイシ軍の後退に乗じて、トフタムイシを打倒する陰謀を企てたのである。彼らに後押しされたのが、先のキプチャク汗であった（青帳汗でもある）ウルス汗の息子クンチェ・オグラと、やはり先の青帳汗チムール・メレクの息子チムール・クトルクであった。「チムール・クトルクの心には君主になろうとする野望が燃え広がった。それゆえ彼はトフタムイシ汗に反乱を企てた。トフタムイシは彼を逮捕し、殺そうとしたが、チムール・クトルクは逃亡し、チムール・ベクのもとに去った」<sup>(25)</sup>

という。この事件に象徴されているように、かつてチムールに敵対したウルス汗を見捨ててトフタムイシを擁立した青帳汗国の貴族層は、今度は、チムールと戦争状態にあるトフタムイシのもとを離れつつあった。トフタムイシはこうした事態に対処するために、モズリスタンの支配者コマル・アディンと同盟したが、これは、かつてウルス汗がチムールに対抗するためにとった政策と同じであった。<sup>(26)</sup>

チムールはトフタムイシ陣営の動揺という好機をとらえてホレズム地方に軍を送った。この軍の前衛は、トフタムイシから逃亡してきていたチムール・クトルクとクンチェ・オグランの部隊であった。ホレズム市の代官イルイグムイシ・イグランとスレイマン・スーフイは大軍の来襲を知ると、トフタムイシのもとに逃げてしまったので、ホレズム地方は簡単にチムールの手に入った。この際、彼は「市とその周辺部のすべての住民と居住民はサマルカンドに移住させられる。ホレズム市は完全に破壊され、ここには大麦の種が播かれる」<sup>(27)</sup>との完全破壊命令を発している。

これに対して、トフタムイシは1388年から89年にかけて再度中央アジア遠征を企てた。ルーシから多数の兵士が集められたのもこの遠征である。シルダリア川を越えて進出したトフタムイシ軍に対して、準備不足のチムール陣営では、エミール達が軍の集結を待って反撃に転じるようにと進言していたが、チムールは「今日のことを明日にのばしてはならない、知ってのとおり、明日になれば明日のことがあるからである」<sup>(28)</sup>といて、即座に反撃に移る決意を明らかにしたという。チムール・クトルクとクンチェ・オグランの先鋒をつとめるチムール軍はトフタムイシ軍を撃破し、トフタムイシ軍はシルダリア川以西に後退することを余儀なくされた。

この遠征の失敗は前年の敗北以上にトフタムイシ政権を動揺させた。多くのエミール——キリスト教に改宗していたバヒイト・ホジャ、カデイル・ホジャ、ママト・ホジャ——がモスクワ公のもとに逃亡しているし<sup>(29)</sup>、有力エミールのバク・ブラート、ホッジャム・アディン、トゥルジャク・ベルズ、ダヴィドがトフタムイシを倒す陰謀を企てた。彼らはチムールと同盟を結ぶためにエディゲイを派遣して、キプチャク汗国への進撃を強く要請した。ここに至って、チムールは本格的にトフタムイシを打倒することを決意した。彼は、講和交渉を求めたトフタムイシの使者に「トフタムイシの側はすでにたびたび条約を破っている。いまさら彼の言葉を信用するのは、それこそ無分別というべきであろう」<sup>(30)</sup>と述べているが、ここには恩義を忘れたトフタムイシに対するチムールの憤りが感じられる。

チムールは1391年2月21日クリルタイを招集して、キプチャク汗国に進撃してトフタムイシを撃つことを決定した。総勢20万といわれる大遠征軍は、4月にはカザフスタンのサルイク・ウゼンに集結した。このときエディゲイの家臣からチムール軍の来襲を知ったトフタムイシも、急遽軍を集めた。両軍の決定的な会戦は、6月18日、ヴォルガ中流、サマーラ近郊のクンドゥルチャ河畔で行われた。チムール軍は長期の遠征で疲労しており、また食料不足にも悩まされており、トフタムイシ軍の方が数の上でも優勢であった（ただし、ヴォルガ川を背にした不利な陣形であった）にもかかわらず、トフタムイシ軍は自軍内の裏切りによって敗北してしまった。戦死者は10万名に上ったという<sup>(31)</sup>。一方、チムール軍もかなりの損害を被ったために、サライなどのキプチャク汗国の中心部に向かわず、ひとまずサマルカンドにひきあげた。しかし、トフタムイシの後退によって、チムールに味方していたチムール・クトルク、クムチェ・オグラ、エディゲイなどの青帳汗国の汗子、エミール達はチムールの家臣として、自分達の旧領に戻った。

## トフタムイシの再興

クンドウルチャ河畔での敗戦後、トフタムイシはカフカース地方に逃亡したとも、リトアニアに逃亡したともいわれているが、1391年秋までの彼の行動については判然としていない。ただし、彼はかなり急速に自分の陣営・軍を立て直したようである。サライはトフタムイシの逃亡後、彼を裏切っていたベク・ブラート（オグラン・ブラート）に支配されていたが、トフタムイシはサライを奪回して、ベク・ブラートをクリミアのソルハトに包囲した。この包囲戦の隙についてチムール・クトルクがサライを占領しようとしたが、トフタムイシはこれも撃退した。結局、1393年初頭には、トフタムイシは青帳汗国の二、三の地域を除いてかつてのキプチャク汗国の全版図を支配するようになっていた<sup>(32)</sup>。

とはいえ、トフタムイシの立場は以前ほど強力なものではなく、このことは対ルーシ政策にも反映されている。彼はモスクワ大公ヴァシーリイ・ドミトリエヴィチの支援を得るために、モスクワ公国のニジニ・ノーヴゴロト公国併合を承認するとの譲歩をしている。「1389年には、汗はニジェゴロト公国のヤルリイクをボリス・コンスタンチノヴィチに与えていたにもかかわらず、……今ではトフタムイシは側近の忠告にしたがって、ヴァシーリイをニジェゴロト公国の相続君主として認めるのにやぶさかではなかった。さらにヴァシーリイはゴローヂェツ、メシチェラ、タラサ、ムーロムを手に入れた」<sup>(33)</sup>というのである。引用文中の「1389年」と「今では」（1392年）との間にチムールの侵攻とトフタムイシの敗北があり、トフタムイシは対ルーシ政策の転換を余儀なくされたことになる。ヴェルナツキイによれば、「トフタムイシは4つの大公国（モスクワ、トヴェーリ、ニジニ・ノーヴゴロト、リャザーン…引用者）の均衡を保つかわりに、今では最強の公国すなわちモスクワ公国に譲歩することに、北東ロシアへの支配権を確保する唯一のチャンスを見出した」<sup>(34)</sup>というわけである。さらに、トフタムイシは対チムール同盟を結成するために、1393年にリトアニア、1394年にエジプト・マムルーク朝に使者を送っている。

## チムールの汗国およびルーシ侵攻

こうして、たとえ一時的であるにせよ内部的にも対外的にも自分の地位を回復したトフタムイシは、再度チムールへの挑戦を開始し、1394年秋、軍をシルヴァン地方に送った。チムールは和平に傾いており、親書をシェムス・アディンにもたせてトフタムイシのもとに送った。トフタムイシも和平提案に応じようとしていたが、側近の助言をいれて、「無礼」な回答をした。「チムールはこの無礼な回答に激怒し、軍の点検・整備をするようにとの命令を発した。」<sup>(35)</sup>

両者の雌雄を決する戦いは、1395年4月14日テレク河畔で行われた。ふたたび、トフタムイシは大敗を喫し、ブルガール地方へと逃亡していった。チムールは先のクンドウルチャ河畔の戦いとは異なって、今度は残敵の掃討を命じたために、チムール軍はヴォルガ川を越えてブルガール地方に進撃し、ブルガール市、ジュカチン市、ケルメンチャク市その他を略奪した。チムールはトフタムイシを追放すると、ウルス汗の息子コイリチャク・オグランをキプチャク汗とした。「彼（チムール）はそこに在住していたウルス汗の息子コイリチャク・オグランに、帝王の宮廷に使えていたウズベクの勇者達の部隊（チムールに帰属していたキプチャク汗国軍…引用者）を与え、汗の徳性なる資質を整え、彼に金の上衣と金の帯を与え、彼にイティリ川を越えるように命じ、ジュチ・ウルスの汗位を与えた」<sup>(36)</sup>という。

一方、トフタムイシ政権を支持していたエミール達は、テレク河畔での敗戦後姿をかくしてしまったトフタムイシに代わって、タシ・チムールを新しい汗として擁立した。<sup>(37)</sup>チムールはこうした動きを鎮めるために、軍をドニエプル川、クリミアにまで進め、トフタムイシを支持するエミールの領地を略奪した。

さらに、チムール軍はルーシ地方に侵入しようとした。1395年夏、チムール軍はリャザン公国のエリツまでやってきたが、なぜかモスクワに進撃しようとせず、8月26日に引き返してしまう。この撤退については、チムールの悪い夢見によっているという説もあるが、旧ソ連の史家は、モスクワ公ヴァシーリイ・ドミトリエヴィチが反撃の準備を整えていたために、これを知ったチムール軍は前進を中止したとの意見を持っている。<sup>(38)</sup>事実、ヴァシーリイおよびモスクワ市民は防衛の準備を整えていたようである。エグゼンプリャルスキイによれば「タメルランはトフタムイシをヴァルガにまで追放し、汗国に新しい汗を擁立した。そして、1395年末（正確には夏…引用者）さらに北に向かおうとした。（モスクワ）は軍を集め、その軍勢とともにヴラヂーミル・アンドレエヴィチ・フラブリイをモスクワに残し、自分はコロームナに進出してオカ河畔にとどまった。恐怖に包まれた民衆は身を清めて神に祈った。大公は、町の強化・補強を命令し、さらに興奮した知性を鎮めるために、主教に手紙を書いて、ヴラヂーミルにある聖母のイコンをモスクワに移すことを命令した」という。<sup>(39)</sup>この中で、チェレブニンはイコンのモスクワへの移転という事件に高い歴史的意義を与え、この事件は「モスクワが全ルーシの政治的・民族的センターとして、ヴラヂーミルの後継者となったこと、モスクワが他国の侵略者との戦いにおいてルーシの結集点となったことの象徴である」<sup>(40)</sup>と述べている。

またチムールの息子ミランシャフの率いる別働隊は、ドン河口にあるアザク市（現在のアゾフ市）を占領・略奪した。同軍はチェルケス人の住むクバン地方にも侵入し、マジャール市を破壊した。さらにチムール軍は帰国するにあたって、アーストラハン市と汗国の首都サライを破壊した。とくにサライはチムール軍の憎悪の標的となり、徹底的に破壊された。「勝利の軍（チムール軍…引用者）はサライを占領し、火をつけて焼き払った。彼らはこの地域の部族と遊牧民の大半を略奪し、追い立てて連行した。サライの破壊は、草原の軍（汗国軍…引用者）がゼンジル・サライを乱暴に破壊したことにたいする復讐であった。というも、草原の軍は、チムールがファルスとイラクの征服に従事していたときに、ガラ空きになったマウランナウル地方を襲撃し、ゼンジル・サライの名で知られるカザン・スルタン汗の居城を破壊したからである」<sup>(41)</sup>という。

こうして、キプチャク汗国はチムール軍にじゅうりんされたのであるが、これによって政治的には、中興の英主トフタムイシは政治的生命を失い、汗国の分裂と混乱は急速に進んでいった。逆にトフタムイシによって再度汗国の属邦とされたルーシは政治的自立のチャンスをつかんだことになる。経済的には、ウルゲンチ、アーストラハン、サライ、アザクといった汗国の重要な交易・手工業センターが破壊されたことで、汗国の経済活動は深刻な打撃を被った。イブン・アラブシャフはキャラバン交易活動の崩壊を次のように記している。「以前には、キャラバンはホレズムから出発してクリミアに至るまで、馬車を使って、平穩に恐怖も危険もなく進んだ。……キャラバンは食料も馬の飼料ももっていらず、（現地の）住民が多いために、案内人もつれていかなかった。道中が安全であり、（当地で生活する）人々は食物と飲み物を持っていたからである。キャラバンはある部族からもう一つの部族のもとへというように旅をし、宿を提供指定してくれる人々がいるところに逗留した。……しかし、今では（チムール軍の汗国侵入以後…引用者）、ホレズムからクリミアに至る地域では、当地の住民と人々の内誰も動かず、生活もしてい

ない、そしてカモシカとラクダ以外の社会は存在しない。」<sup>(42)</sup>

### キプチャク汗国の解体

1396年チムールが帰国した後、汗国には中央政権は存在しなくなった。汗国各地に、有力な王侯・エミールが独自の勢力圏を築いていた。ヴォルガ左岸のサライを中心とする地域には、チムールに擁立されたコレイチャク汗が、ヴォルガ下流のアーストラハンを中心とする地方にはチムール・クトルク汗が、ヤイク川周辺地方には有力エミールのエディゲイが、そして、クリミアにはトフタムイシ派のエミールによって擁立されたタシ・チムール汗が地方政権を打ちたてていた。さらに、トフタムイシも完全に没落してしまったわけではなく、再起の機会をうかがっていた。

この4者のうち、コレイチャクとタシ・チムールは1396年には姿を消した。コレイチャク汗は確固とした支持勢力を持っていなかったようで、チムールの帰国後「チムール・クトルク・オグランの到着の知らせがもたらされると、すべての部族は（コレイチャクのもとを）去りはじめた。コレイチャクは側近の者と逃亡し、領土はチムール・クトルクに渡り、エミール達はエディゲイに帰順した」<sup>(43)</sup>という。タシ・チムールの運命はトフタムイシの再起と関連していた。トフタムイシはチムールに敗北した後、残存兵力とともに、おそらくブルガール地方に潜伏していたと思われるが、チムールが帰国すると再度、姿をあらわしクリミアを占領した。エジプト側の史料には「『北ステップ』国の君主で、キプチャク人の土地でベルケ汗の地位についていたトフタムイシ汗は、軍勢を集め、カフファ市の所有者に対して進撃した。カフファ市はクリミア沿岸にあり、ジェノバのフランク人（西ヨーロッパ人…引用者）のものであった。双方の間に戦いが起こり、トフタムイシ汗は町の包囲にとりかかった」<sup>(44)</sup>とある。トフタムイシの目的は自分の軍隊を再建するための資金であったのであろうが、トフタムイシのクリミア進出によって、それまでここを根拠地にしてきたタシ・チムールは姿を消してしまった。

一方、ともにチムールに臣従するチムール・クトルクとエディゲイの陣営も統一され、前者は汗として、後者は共同統治者として君臨した。この陣営の軍は、1396年末か1397年初頭にトフタムイシをクリミアから追放し、トフタムイシはキーエフ方面に逃亡して、リトアニア大公ヴィタウカスに支援を求めた。

この当時、東ヨーロッパ最大の強国であったリトアニアは、東方のルーシ方向と、南方の黒海方向に版図を拡大しつつあった。大公ヴィタウカスにとって、トフタムイシを支援することは、第一に、クリコーヴォの戦い以来汗国軍と戦ってきたルーシ諸公の好意を獲得するという利点を持っていた。事実、クリコーヴォの戦いに参加したポーロツク公アンドレイ・オリゲリドヴィチ、ブリャンスク公ドミートリイ・オリゲリドヴィチ、ドミートリイ・ボブロークは汗国軍と戦うというヴィタウカスの路線を支持し、これによって、リトアニアのルーシへの影響力は強まったのである。第二に、トフタムイシがリトアニアの支援によって再起に成功した場合、リトアニアは汗国に対して無視し得ない力を持つことが出来るという利点があった。ヴィタウカスとトフタムイシの協定では、ダイタウカスがトフタムイシに「汗国の汗位」を約束し、トフタムイシはヴィタウカスに「モスクワ大公国、全ルーシの土地」をあたえることになっているが<sup>(45)</sup>、これは、二人が東ヨーロッパから中央アジアまでの広大な領域の勢力範囲を定めたものといえる。

ヴィタウカスはトフタムイシを支援して、チムール・クトルクとエディゲイに対する攻撃を進

めるにあたって、慎重な外交的準備を整えた。後背、側面からの危険を取り除いておくために、ポーランドの支援を確保し（実際はポーランドからの援軍は少なかったが）、1398年には、チュートン騎士団と条約を結び、ジェマイティア地方を譲渡する代償として、ノーヴゴロト制圧の支援を確保した。<sup>(46)</sup>モスクワ大公ヴァシーリイは義理の父ヴィタウカスのこうした拡張政策に懸念を抱いていたが、すぐさまリトアニアとの関係を緊張させようとはせず、当面は中立を維持していた。

以上のような準備を整えた上で、ヴィタウカスは大軍をステップ地帯に進めた。リトアニア軍、トフタムイシ軍と並んで、少数ではあるが、北西ルーシの諸公軍、ポーランド軍、チュートン騎士団軍もこの遠征に参加した。これに対して、チムール・クトルクとエディゲイの側も大軍を動員したために、両軍は、1399年8月12日、ドニエプル川支流のヴォルクスラ河畔で衝突した。この会戦で、リトアニア・トフタムイシ連合軍は大敗し、ヴィタウカスとトフタムイシはかろうじて逃亡することに成功したものの、ポーロツク公アンドレイ、ブリャンスク公ドミートリイ、ドミートリイ・ボブロークは戦死した。大勝したチムール・クトルク＝エディゲイ軍はキーエフやポドリア地方に進撃し、先年リトアニアの支配下に入っていたブク川下流地帯（リトアニアの黒海への進出路）を制圧した。このヴォルクスラ河畔の戦いで、ヴィタウカスはトフタムイシを支援する力を失い、トフタムイシはシベリア地方に姿をかくした。（続く）

#### 註

- (1) この間の事情をフォードロフ・ダヴィドフはこう説明している。「青帳汗国では社会的過程はより緩慢にしか進まなかった。青帳汗国の貴族層が内紛にかかわり、ジュチ・ウルスの中央権力を定期的に奪取するようになると、彼らが自分のウルスの中で直面したのは、13世紀から14世紀の転換期のトフタ汗の治世に右翼の貴族層が直面したのと、ほぼ同じ課題であった。これはトフタムイシの行動にとくに明瞭に現れていた。彼は、自分の統治の初期には中央集権化政策を実施し、青帳汗国の貴族層に依拠していた。トフタムイシは都市生活の活発化を目的として、幣制統一改革を実行したが、このことはトフタムイシが、遊牧貴族層と都市との結び付きを強めることを通じて、汗国の統一をはかろうとしていた（トフタやウズベクが自分の時代にそうしたように、ただしトフタムイシの場合には青帳汗国の貴族層にだけに依拠したのであるが）ことを立証している。」Г. А. Фёдоров=Давыдов, *Общественный строй Золотой Орды*, М., 1973, стр. 150.
- (2) М. Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, Саранск, 1960, стр. 137-138.
- (3) В. Тизенгаузен, *Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том II, извлечения из персидских сочинении.*, 1941 (Тизенгаузен II), стр. 60-61.
- (4) Там же, стр. 131.
- (5) Там же, стр. 147.
- (6) Там же, стр. 147.
- (7) Там же, стр. 148.
- (8) Там же, стр. 108.
- (9) В. Тизенгаузен, *Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том I, извлечения из сочинений арабских*, СПб., 1884 (Тизенгаузен I), стр. 142.
- (10) М. Сафаргалиев, *указ. соч.*, стр. 143.
- (11) Тизенгаузен II, стр. 132.
- (12) Тизенгаузен II, стр. 150-151.
- (13) G. Vernardsky, *The Mongols and Russia*, L., 1953, p.263.
- (14) 旧ソ連史家チェレプニンはマルクス主義的な階級闘争史観から、このモスクワでの動きを「蜂起」と呼んでおり、この結果、「モスクワの政治的指導権は民衆に移り、その限りでは、この蜂起は反封建的方向性を持っていた」と述べている。Л. Черепнин, *Образование русского централизованного государства в 14-15 вв.*, М., 1960, стр. 635.

